

次男が中学へ進学し少しホッとしていた4月14日、夕食の後急に気分が悪くなり嘔吐と下痢の症状が続き、それもコールタール色をしており、貧血をおこしたのか立ち上がれなくなりました。翌日病院へ行き、症状を先生に伝えると、先生は下血を確認され、すぐに胃カメラの検査をしましょうとの事で初めてカメラを飲みました。カメラの検査では異常はないとの説明でしたが大量の吐血の原因が分からないとの事ですぐ検査入院をして下さいと先生に伝えられ、まさか入院になるとは思っていなかったので一度家に帰宅させてもらいあわてて入院準備をしたりその夜の家族の夕食を作ったりと大変な一日となりました。

息子達は中学一年生と中学三年生、今後の生活はどうなるのかと心配しながらの入院生活が始まりました。翌日から絶食、点滴が続き、心電図、レントゲン、CT、大腸の検査など…。貧血もひどく輸血もはじまりました。入院して一週間後2回目の胃カメラの検査があり組織をとり検査に。結果に異常がなければ退院との話も出ていたが、検査結果があまり良くなく手術をする必要があるとの先生の話がありました。当時告知がまだ、一般的ではなく、主人には胃癌との説明がされていましたが私には出血性の胃潰瘍で胃の3分の2を切除する必要があるとの話でした。当時私は、その話を信じておりまさか癌とは疑いも持っていませんでした。入院してから40日目、5月26日、手術を受けました。6時間ほどかかり、胃をほとんど摘出したとの事で、でも幸いにガンが胃の粘膜内にとどまっており転移の心配はないとの説明が主人にはあったそうです。

私自身手術回復室に移された後、少しずつ意識がもどり、父や姉、主人などの頑張れよの声が何度も聞こえたのが印象深く思い出されます。

2日後にはベッドの横のポータブルで看護師さんに助けをもらいながら尿をする。お昼からはトイレまで歩いて行けるほどに回復、でも起き上がるのが痛みがあり辛かったのを思い出します。一週間後流動食がはじまる、当時、トイレに行くたび下痢が続き、食事を摂るのが恐く少ししか食べられませんでした。食事の不安を先生に話すと、今は5～6回に分けて少しずつしか食べられないけれど、将来は一日3回の普通の食事になりますよとの説明がありました。

少しずつ体力も回復してき、息子の事などをいろいろ考えていると退院したいという気持ちがつり、一週間ほど早い、6月19日に退院をさせて頂きました。その日の夕方、主人から、早期の胃癌であった事、息子達にも、退院前日に、お母さんは早期の胃癌だったが手術して悪いところは全部切除したので、もう大丈夫だと話をしたとの事でした。私も何となくモヤモヤしたものがスッキリし、きちんと話し

でもらえた事に感謝しました。ただ、私も先生から説明を受け、納得した上で手術を受けられていたらなあと言う気持ちは少しありました。

手術後の後遺症としては、(1)ダンピング症候群(食後の腹痛、低血糖状態による脱力感、外出には飴やチョコレートなどを必ず持ち歩く様にしています。)(2)逆流による食道炎と胸やけ(特に真夜中)回数は減少(3)消化不良、下痢と便秘の繰り返し、(4)貧血、低血圧などなどあります。現在も症状は少なくなっていますが上手につきあうように努力しています。40才で癌の手術を受け、来年60才になり、20年という月日が経とうとしています。ここまで来れたのも、主人、息子達、入院中にお世話になった親類、友達、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

残された人生、少しでも、誰かの役に立つ様に生きていきたいと思っています。

